

# 報告要旨

## 報告1 エリザベス期イングランドにおける「リパブリカニズム」 ——ジョン・スタップズの『亡国論』と「助言」の概念を中心に——

報告者 : 山根 明大 (立教大学大学院博士課程)

コメンテーター : 小林 麻衣子 (立教女学院短期大学)

「リパブリカニズム」(もしくは「シヴィック・ヒューマニズム」)研究はH. バロンに始まり、J. G. A. ポコックによって発展させられ、現在は多様化の一途を辿っている。とりわけ、P. コリンソンとM. ペルトネンは、ポコック(あるいは彼の視点を共有した歴史家たち)が内乱期以前のイングランドにおける「共和主義のような様式(quasi-republican modes)」を過小評価していると批判したが、その二人の研究も当時の「リパブリカニズム」(らしきもの)を十分に検証・体系化できていないように思われる(その傾向は、特にエリザベス期において顕著である)。本報告では、エリザベスとフランス王弟アンジュー公の結婚に異議を唱えたジョン・スタップズ(Stubbs, John, c. 1543-90)のパンフレット(1579年刊)を取り上げることにより、エリザベス期の「リパブリカニズム」について考察する。因みに、本報告における「リパブリカニズム」は、「政治参加」(厳密には「政治的出版」)の動機もしくは道具としてのそれであり、広義の「共和主義的思考」を指している。

## 報告2 バークリにおける記号理論——精神と神の形而上学によせて

報告者 : 竹中 真也 (中央大学大学院博士課程)

コメンテーター : 一ノ瀬 正樹 (東京大学)

従来のバークリ研究は非物質論に傾斜しがちであったと思われるが、バークリにはもうひとつ興味深い議論がある。それはバークリの記号理論である。そして、その記号理論のひとつの核心があらわられているのは、かれが当時の自然学と宗教ないし神学とを調停し融和させようとする局面であると思われる。バークリは当時の最先端の自然学に精通していたのみならず、その有用性も承知していたと言ってよい。しかも、そうした自然学の隆盛の中にあっても、聖職者バークリとしては宗教ないしは神学もまた確保しようとしていたのである。本報告は、バークリがいかにして自然学と宗教ないし神学との融和を果たそうとしたのかという問題の解決を、自然学と宗教における記号の扱い方に焦点を当てて示す。そのさい注目するのは、自然学における「指標(mark)」と、宗教における「象徴(token)」との関係である。こうすることによって、自然の創造主の言語説というバークリに特異な議論の構造をわずかながら解明し、幻となった『人知原理論』第二部「精神と神の形而上学」の一端を明らかにするとともに、現代の記号理論にも一脈通ずる議論が、バークリにあったことを示す。